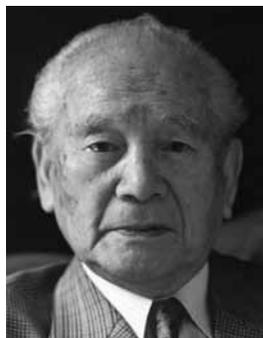


もり た しげる
森田 茂

ゆうげん えが いざい
幽玄の世界を描き 異彩放つ画家 筑西市



明治40年(1907) - 平成21年(2009)。真壁郡下館町〔筑西市〕生まれ。幼少期は母の実家である同町の村岡家の祖父母のもとで育つ。6歳で下館男子尋常高等小学校に入学。17歳で茨城県師範学校〔茨城大学〕を卒業。熊岡美彦の設立した熊岡洋画研究所に入り、熊岡の指導を受けるとともに、熊岡らの東光会にも参加して創作活動に励む。31歳のとき文部省美術展覧会出品の「金蔵獅子」が特選となる。その後ライフワークとなった「黒川能」を描いた多くの作品を発表する。これらの作品は色彩が強烈で、油絵具を厚く塗り重ねる技法が特色。63歳で日本芸術院賞受賞、ついで86歳で文化勲章を受章し、茨城県名誉県民の称号を受ける。

森田茂は、明治40年(1907)、真壁郡下館町〔筑西市〕に父・善四郎、母・ふさの長男として生まれました。生後まもなく軍医だった父が母とともに東京へ出たため、茂は母の実家の、同じ町の村岡家の祖父母のもとで育てられることとなります。

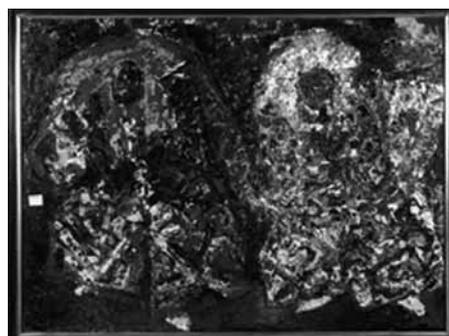
生後まもなく、肺炎にかかり命も危ぶまれる状態になった茂は、祖母の一心不乱の神仏への祈りで奇跡的に助かったといえます。その後も、信仰心のことのほか篤かった祖母は、茂の手を引いてよく近くの寺へお参りに出かけました。

幼い時のこの体験は、茂の心のふるさととして終生忘れられない思い出となっただけでなく、画家として大成するうえでの原点ともなったようです。

茂は6歳で下館男子尋常高等小学校〔筑西市立下館小学校〕へ入学しますが、それからは父の勤務先の関係などから東京・大阪・宇都宮に住み、学校も何度か変わりました。17歳のとき水戸の茨城県師範学校〔茨城大学〕へ入学し、この頃から油絵を描きはじめます。卒業すると真壁郡の小学校の教員になりますが、21歳で退職し東京へ行きます。東京では小学校に勤めるかわら、茨城県出身の先輩熊岡美彦の設立した熊岡洋画研究所の夜間部に入り、その指導を受けながら、やはり熊岡らの東光会という画家のグループに参加し創作活動に励みます。

31歳のとき第2回の文部省美術展覧会(新文展)で「金蔵獅子」が特選となり、その才能が高く評価されます。「金蔵」とは、飛騨高山(岐阜県)の農村に伝わる獅子舞のことです。この前後、「金蔵獅子」を題材とした数点の作品を制作していますが、当時、神秘的な雰囲気をもつこの郷土芸能に強い関心を持ちはじめていたのです。32歳になると、学校を退職し、画業に専念しようと決意します。

郷土芸能への関心は、ライフワークとなった「黒



「黒川能 石橋」1983年
しもだて美術館蔵

川能」を描いた多くの作品へと受け継がれ、さらに深められていきます。茂は、59歳のとき、山形県の羽黒山に山伏の修行の様子を見に行き、偶然目にした「黒川能」の幽玄な世界にすっかり魅了されてしまいます。「黒川能」は、羽黒山近くの神社の神事能として氏子たちの手で500年もの間守り受け継がれてきたものです。

茂は60歳頃から、みずからも能の稽古に打ち込むようになります。「実際に自分で演じて役者の呼吸や間の取りかたを感じとってみなければ、能の本当の姿はわかるまい。それがわからなければ、人に感動を与える作品はできないのだ。」

茂の画家としての気魄の伝わってくる言葉です。また、次のようにも述べています。「絵画とは、その作者の精神の表現だと思う。だから、そこに感動や熱情が表現されなければ、見る人の心をゆさぶるようなものはできない。」

茂は、以後、「黒川能」を中心としながら、富士、城、牡丹など、いろいろな題材を描いていきますが、どれも色彩が強烈で、油絵具を厚く塗り重ねる技法を用いています。茂にとって、その色彩・技法こそ、みずからの「精神の表現」にふさわしいものだったのでした。

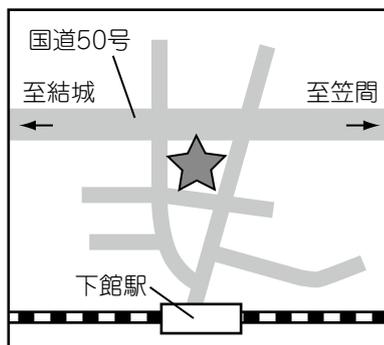
63歳のとき日本芸術院賞を受賞した茂は、その後も盛んな創作活動を続け、86歳で文化勲章を受章、茨城県名誉県民の称号も授与されました。亡くなったのは平成21年、101歳の長寿を全うした生涯でした。

ゆかりのスポットに行ってみよう

しもだて美術館

所在地 筑西市丙372

内容 平成15年に開館して以来、筑西市にゆかりのある作家の作品を収集・展示しており、森田茂の作品も常時見ることができます。



おもな 参考文献

『傘寿記念 森田茂展』(朝日新聞社・1997)

『森田茂展 下館市制施行50年記念・しもだて美術館開館特別展』

(しもだて美術館・2003)